かも市史だより

平成15年3月
No.7

◆編集発行　加茂市幸町2丁目3番5号　加茂市教育委員会内市史編さん室☎　0256(52)0080　内線480

■ 西光寺の阿弥陀如来立像 ■

私は、主に市内の神社・寺院等に伝えられ、地域の人々の信仰を集めて大切に伝存されてきた神像・仏像類の調査を進めております。

写真は市文化財の、八幡の西光寺（時宗）本尊の木造阿弥陀如来立像（像高一一三㎝）です。西光寺はもと天台宗で、建治三年（一二七六）に時宗に改宗して中興されたと伝わります。鎌倉時代から盛んとなる来迎形の阿弥陀像で、通常のものよりすこし大型です。檜材の寄木造で内刳が施してあり、表面はもと漆箔仕上げだったと思われます。丁寧な作りで、全体におだやかな表現の優れた像です。

今から八年前に本像を調査された慶應義塾大学名誉教授故西川新次先生は、髪際の螺髪の張り出し方や襟の複雑な折り返し、裳裾の折畳み方などから、制作時期を十三世紀後半とされました。寺伝の中興時期と重なります。

ただ、全体に損傷が進み痛ましい感がします。このままでは市を代表する優れた仏像が、その文化財的価値を失いかねない状況です。多くの市民のご支援により早急な補修が施され、地域の宝として伝えられることを願います。

（文化財部会　羽二生寛興）

加茂の金次郎像

江戸時代後期の農村復興の立役者は民衆のお手本か軍国主義の象徴か？時代に翻弄されたノスタルジック・アイドルの昭和一代記。

加茂市には現在三体の二宮金次郎像が存在しています。七谷小学校の銅像と須田小学校の石像、それに民俗資料館の倉庫にある陶製のものです。これはかつて下条小学校にあったものです。

▲（左から）七谷・須田・下条（旧蔵）各小学校の二宮金次郎像

二宮金次郎像は「勤倹力行」「立身出世」を象徴して建てられたものですが、小学校で「修身」を学んだ人が数少なくなった現在、その像が建てられたいきさつについてはいろんな誤解が存在しているようです。

日本軍国主義の尖兵（せんぺい）として建造されたとか、全国一斉に国家の命令で建てられたなどです。しかしそれらはことごとく事実と違っています。

ちなみに七谷小学校のものは昭和十五年（一九四〇）六月、三条の金物商栗山武三郎氏によって寄贈され、昭和十六年（一九四一）六月に除幕され、献納の後、戦後再び同氏に依頼して建立されました。

下条小学校のものについては昭和十五年十一月二十八日の新潟新聞（新潟日報の前身）が伝えています。

下條小へ銅像

加茂町の隣村下条村大字天神林出身、川崎市中幸町土木建築請負業岩井浪治（五一）は郷土愛の精神に燃え同村小學校へ二千六百年奉祝記念として二宮尊徳の銅像を寄附せる。除幕式は去る二十三日新嘗祭の佳辰を卜し盛大に挙行した。銅像の身長は四尺五寸、臺座は石臺で一丈余、総工費一千数百圓である。（以下略）

今は像はありませんが、加茂小学校にも昭和十五年に町内の外山亮輔氏によって、南小学校には昭和十三年（一九三八）に東京在住の近藤松治氏によって寄贈されたと記録にあります。

このように二宮金次郎像のほとんどがその小学校出身の篤志家によって寄贈されたもので、それは全国的にまきおこった不思議な「草の根運動」というべきものでした。

国家はそれに対してほとんど関与していなかったようです。この頃になると「修身」の教科書から二宮金次郎は影をひそめ、むしろ国は奉安殿（御真影を安置する）や楠正成像を推し進めましたが、それとは反対に金次郎像だけが普及する結果になりました。

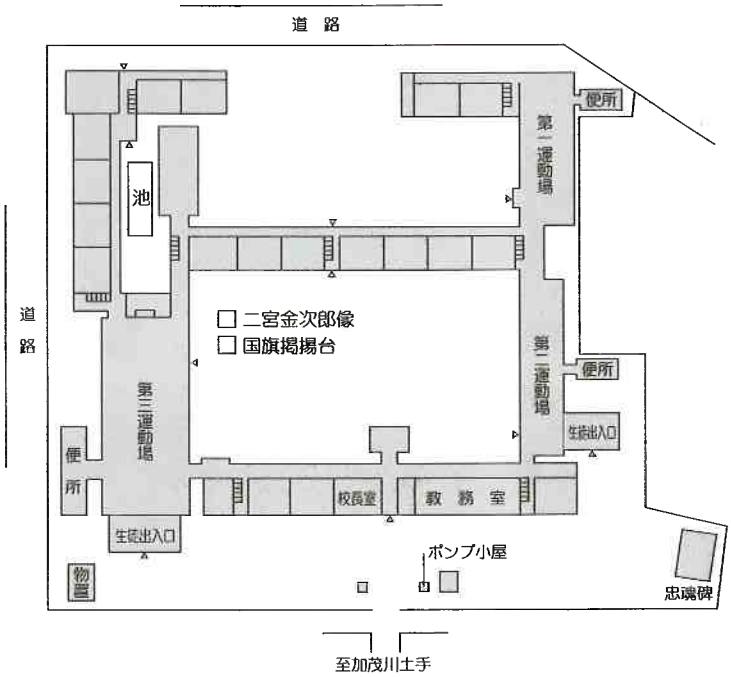
須田小学校のものにも奇妙な現象が見られました。『須田小学校百年の歩み』によれば、同校のものは昭和十六年十月二十八日竣工し、その日のうちにその銅像が献納されました。理由ははっきりしませんが、当時は太平洋戦争突入の直前で金属の供出がはじまっていました。そこで、何らかの理由で建立が遅れたためにこのような結果になったものでしょう。その身代わりとして翌年の七月二十日に金次郎像の除幕式が行われました。これが現在須田小学校の校庭に建っている石像です。

昭和十六年末から十七年の太平洋戦争のさなか、「尊徳（金次郎）さんは出征する」として多くの銅像が献納され、代わりにセメント、石像あるいは陶製のものが建てられ、終戦を迎えました。

金次郎像は激動の昭和史の証人として、「柴」ならぬ幾多の苦労を背負いながら、今もそこに立っています。春の一日、ご家族一緒にお近くの金次郎像をご覧になっては如何でしょうか。

なお、この一文をまとめるにあたり七谷の長谷川昭一さん、学校町の本間正さんのご協力を得ました。

（近現代部会　中山之隆）



▲ 昭和37年春頃の加茂小学校校舎配置図（本間 正氏作図）
国旗掲揚台の脇へ戦中そのままに安置されていた像の場所からも往時の金次郎の位置付けが窺える

かも私史

昭和二十年代の賽ノ神の思い出

黒水西
高井 亨

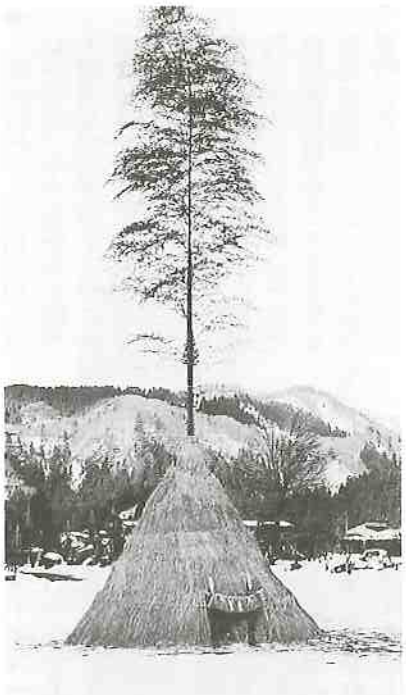
小正月の思い出として今も残っているのが、賽ノ神です。私らが高等科二年、昭和二十二年の頃のことです。この頃、黒水には合わせて八か所で賽ノ神が作られていましたが、私らの西区では一か所、字程の下という所の田圃の広場でやっていました。

年上の私らを頭に、小学一年生まで入れて、年長の指図で、元気出して子供達だけでやっていました。今のように大人は参加しなかったし、女子どもは見ていただけのように記憶しています。

当時はまだどこの家でも藁は豊富にあり、一軒の家から五束から十束出して貰い、それを子供たちでハコソリに付けて地区の子供だけが知っている、決まった場所まで運んだものです。どの地区でも集めた藁の番をしたものですが、これをこっそり盗ってきて燃やし得意になって、自分らの賽ノ神を一番最後に作ったこともありました。

賽ノ神は竹・藁・門松・ユズリ葉で作っていました。竹は地区の茂野様から三本貰って来て、これを真っ直ぐに立て、そこへ藁や各家で飾った門松・ユズリ葉を重ねて作ったものです。竹の穂先には子供達の書初めを結わいました。それと賽ノ神の本尊とも言うべき、「ジジ・ババ」の二体を入れ燃やしました。これは「カツの木」という太さ二寸位の生木の皮を剥ぎ、顔を描いた夫婦二体の道祖神です。

当時、「サイの神のきんばりは、煮ても焼いても、まくらわねぇ（食べれない）まくらわねぇ。男の中のオンナ子は、煮ても焼いても、まくらわねぇ、まくらわねぇ」と、賽ノ神を燃やしながら、大きな声でハヤシたものです。



▲ 今年（一月十二日）の黒水西区の賽ノ神

昔を偲んで現代を生きる

西山
坂上千里

朝三時半頃にはあちこちの家に灯がともり、紙すき作業の一日が始まります。

西山部落では半数が紙すきをし残りの家は炭焼き、又中年の男衆は県外への行商と、この三つが現金収入の源となっていました。

高等小学校を卒えるのを待っての私の仕事は紙を乾燥させる作業でしたが、その頃週一度の青年学校がありました。「どうしても本科へ進みたいのなら一日分の仕事を稼ぎ出して行け」と父との約束で毎晩夜なべをしたものでした。でも、希望に若さも加えて辛くも苦しくもありません。

日中戦争に際し、一番の働き手であった叔父が徴兵され入隊。従兄も招集されて行きました。私たちは赤紙一枚で次々と召されて行く若者を集落の神社前で武運を祈り送りますが、「生か死か」という本人家族の心境を察するに胸の詰まる思いがしたものです。日毎に募る人手不足に、紙すきもやむなく廃業となる家が増えていきます。木の芽吹く春となれば野良仕事が待っており、現代のように化学肥料も農薬もない時代で、少しでも多く穫れるよう小さな田んぼでも必至に耕しました。銃後の守りは私たちでと女子消防団を結成し、公休日の一割をさいて腕用ポンプの練習等もしてきました。

家では大根・麦・薯、果ては野草の葉までも入れたご飯で過ごしたこともあります。今思うに、その粗食が大正・昭和初期世代の長生きに関連しているのかと考えられます。突如八月十五日、陛下の敗戦のお言葉で涙して途方に暮れましたが、それまでの試練は心身ともに私たちを強くしてくれました。

戦後の高度成長でガラス戸が普及し、紙すきの原料となる楮も生産地群馬の楮畑が養蚕用の桑畑に転作してしまい確保出来ず、ますますの人不足もあって昭和三十五年頃、我家でもとうとう廃業に踏み切りました。自ら考案し、村松の職人さんから造って貰ったビーターという楮を溶かす機械を大きなハンマーで壊している父と、それを見つめている私の末っ子の涙を今も思い出します。

▲ 七谷村の村松町陸軍練兵場への慰問（昭和17年9月23日）

▲ のぼりには警防団とあるが正確には女子消防団の集まり。左に写っているのが腕用ポンプ（昭和18年頃）

探しています

◆ 寒中の一定期間、厳重な戒律と禁忌の下に勤行する寒倉講は、今ではほとんど見ることのできなくなった習俗ですが、この講について以下の事を知りたいと望んでいます。

§ 黒水の寒倉講では昭和三十四年に地元の寄附を募り、荷車に載せて引く形の霊柩車を購入したそうです。その写真が残っていませんか。

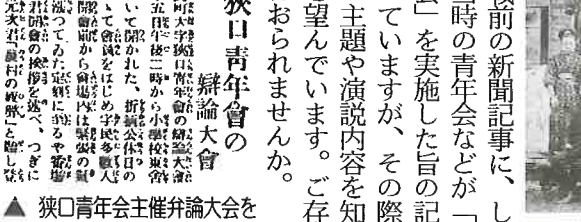
§ かつて講中に死者がでると、白装束で念仏を唱え野辺送りをしたといいます。その様子が収められた写真をお持ちの方はおられませんか。

▶ 黒水の寒倉講　昭和三十三年までは川に浸かり勤行したという（写真は昭和三十七年撮影）

◆ 明治時代から昭和の初め頃にかけて、小学校教育の補習と簡易な実業教育を目的に実業補習学校が設けられました。夜間、あるいは季節を限っての教育も認めたことから加茂市域でも大正八年に須田村、翌年には七谷村にそれぞれ農業補習学校ができるなど急速に普及したものですが、当時の教材など残っていないでしょうか。

▲ 下条実業補習学校女子部の集合写真（大正12、13年頃　諸橋トシ氏所蔵）

◆ 戦前の新聞記事に、しばしば当時の青年会などが「弁論大会」を実施した旨の記事が載っていますが、その際の弁士の主題や演説内容を知りたいと望んでいます。ご存知の方はおられませんか。



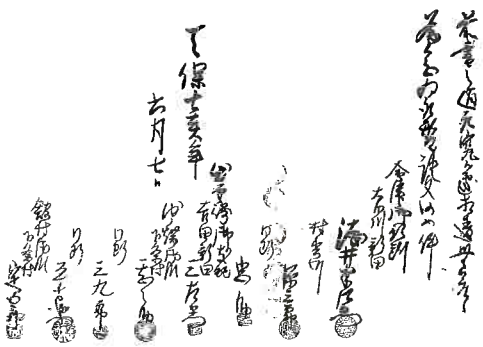
狹口青年會の
辯論大會

▲ 狹口青年会主催弁論大会を報ずる記事より（大正15年3月17日付　新潟新聞）

◆ 写真は天保十年（一八三九）六月七日の八十里越改修普請を取決めた古文書の末尾です。

八十里越は下田の吉ケ平と会津の叶津を結ぶ峠道ですが、鞍掛峠から木根坂までの改修について、大白川や村松町・下条村の人達が普請の分担などを取り決めています。連印者の下条村四人のうち、甚之助どんは分かりましたが、三九郎・平右衛門・定五郎が現在どこの家か分かりません。

下条村の人が十一里余も離れた八十里越にどのような関わりを持ったのかを解明する手がかりになりますので、御存知の方は教えて下さい。



▶ 天保十年六月の為取替規定証文（末尾四人が下条村の人々）

◆ 日中戦争から太平洋戦争にかけての生活の様子を調べたいと思っています。次の事項についての体験をお聞かせいただけませんか。

§ 軍艦等を建造するための国防献金や国債購入の勧奨

§ 家庭に眠った鍋・釜や貴金属などの金属供出

§ 出征兵士の激励に留守家族の写真や手紙・医薬品などを送った慰問袋

§ 婦人会、隣組常会、町内会などでの話合いの内容

§ 防空演習とその状況

設業保管證
戰時報國債券 第8回
347ノ組 00330
兼面金額 5圓
戰報8

▲ 戦時下に発行された債券（民俗資料館所蔵）

▶ 加茂町から出征した兵士の家族が送った慰問写真※（昭和十八年）

※郷土出版社『目で見る三条・燕・南蒲原の100年』より

編集後記

今号も鎌倉時代から現代までの、加茂にまつわる様々な話題を揃え発行することができました。一瞥しただけでは窺えない人やモノの歴史に、一読して強い感興を覚えるのは編集子のみではないでしょう。

近く『レポート加茂市史』第二号が日の目を見ることになっています。こちらもご精読をお願いいたします。

扉を開ければ、先人の知恵

「レポート加茂市史」創刊号
市役所各機関にて 好評発売中!!

★ 以下続刊 ★